

ドイツ・ケルン大学への留学を終えて —ライン川沿いの文化の中心地 Köln—

医歯学総合病院 重 谷 佳 見
(歯の診療室)

2006年9月から半年間、ドイツのケルン大学客員研究員として留学する機会を得ました。この度、歯学部ニュースという場をお借りして、半年を過ごしたケルンの町の様子やラボ生活の一部をご紹介します。

2005年秋、興地教授より「ケルン大学への留学のお話があるのですが、どうですか？」とお話がありました。若いうちに留学をするようにとの様々な先生方からの勧め、日本以外の世界を見てみたいという自身の気持ち、何より家族が誰一人反対することがなかった為、意外にあっさりと留学は決まりました。一方、異国の地で単身赴任生活ができるのだろうか？ 言葉は大丈夫なのか？ など不安も多々ありました。準備期間は半年ほどあった筈でしたが、大学の業務と研究に追われ、ほとんど何もしないまま徒に時間は過ぎ……。あっという間にドイツへの出発の日を迎えてしまいました。

いざドイツ入国。困惑する事は多々ありましたが、最たるものは契約です。アパートメントや車のレンタル、電話回線等々、契約書はすべてドイツ語(当然なんですが)。特に電話会社との契約には苦心惨憺しました。近所の支店には英語ができる人がいないとか、インターネット開通用のCD-ROMが読めないとか、約束した日時には回線が開通しないとか……、その都度遠方の大きい支店まで訴えに行くという、トラブル続出でドイツの生活は幕を開けたのでした。

ドイツ第4番目の都市であるケルン

人口約100万人、面積約405km²のケルンはドイツでもっとも古い都市の一つです。今日でも古代ローマ時代の町壁の一部、5つの町門、水道の一部、ディオニソス・モザイク等、当時の数多くの足跡を見ることができます。またケルンに一際高く聳え立つ世界遺産ケルンドームの塔は遠くからでも見ることができます。高さは157mでケルンの



ケルンの町

建設物では2番目の高さですが、その存在感はNo.1です。ライン河と歴史的な旧市街に囲まれ、中央駅の目の前にあるこのドームを目的として毎年180万人以上の訪問客がケルンを訪れます。ドームの塔は屋上まで上ることが出来るのです。私も数回上りました。とても長く狭い階段は、頂上まで上るのも、登頂を断念する人とすれ違うのも一苦勞。でもこの塔の上で様々な国の人と会話を交わし、非常に有意義な時間を持つ事ができました。このような歴史的建造物を有するケルンの都市計画は現在も古代ローマの道路網を反映しています。またケルン地方はドイツ第3の産業立地でもあります。化学と製薬部門においてケルンは欧州の中心地の一つであり、自動車産業と機械製造においても世界の大手企業がこの町に集まっています。

ドイツといえば

私がドイツという国から連想するものは、3つありました。ありきたりですが「ビール」「ソーセージ」「サッカー」です。この3つについて紹介します。

まずは、ビール。ドイツは皆さんがご存じのようにビールの国です。主要地方ごとに特有のビールがあります。ケルンは「明るい色の表面発酵のビール・ケルシュ」で有名な町です。ケルシュという名前のビールはケルンで醸造されなければなりません。ケルンは世界で最も醸造所の多い町で、ケルンとその郊外にある24の醸造所で、横木に置かれた細い筒型のグラスに注がれる独自のビール

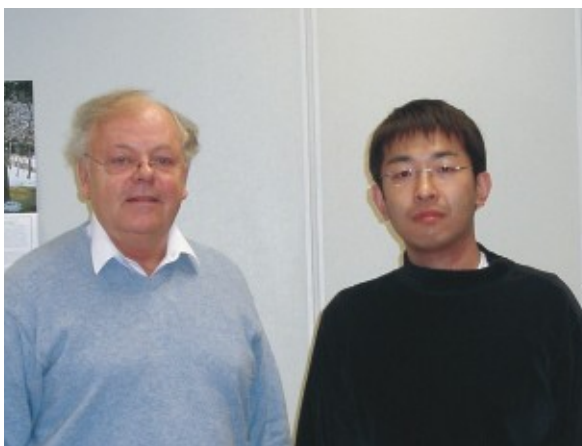
が醸造されます。

次にソーセージ。ドイツにおけるソーセージ（Wurst・ヴルスト）の地位は、日本におけるそれとは比較になりません。ドイツは「ソーセージ大国」だなぁ、とつくづく思うほど頻繁に食べますし、種類は1500を下らないようです。レストランでナイフとフォークを使って食べられることは稀。やはり屋台の焼きたて・茹でたてをスタンドで立ち食いするのが美味しいです。特にケルン駅のスタンド、最高でした。

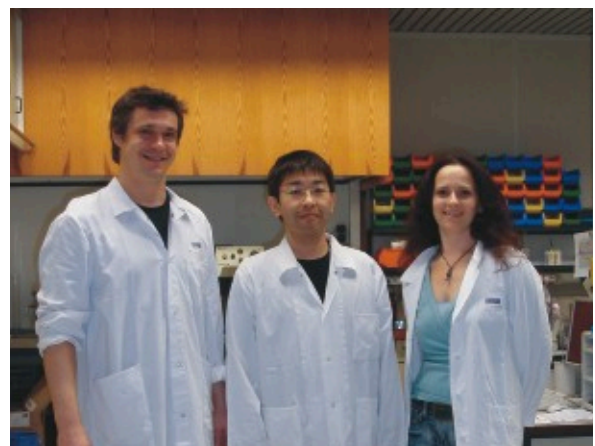
最後に、誰もが認めるサッカー大国ドイツ。そのプロリーグであるブンデスリーガは100年の歴史を誇り、平均観客数はヨーロッパNo.1。雄ヤギをマスコットとする伝統的クラブであるFCケルンは、ケルンで最高度の名声を誇っています。旧市街、ドーム、そしてライン河が愛されているように、「雄ヤギ」もケルン市民に愛されています。一部だろうが二部だろうが、チームを愛する市民にはどうでも良いことのようにです。

ラボでの生活

さて、前述のようにトラブル続出で幕を開けたドイツ生活ですが、ラボの皆さんのおかげで軌道に乗りました。まずは、ケルン大学 Werner J. Finger教授です。Finger教授はこれまで様々な歯科材料の開発に携わり、世界的な歯科理工学の権威です。この教授の下、新規 All-in-one adhesive systemの開発に向けて、基礎的研究を行ってきました。近年、改良が進み、接着操作を簡略化させ、エッチング、プライミング及び



Finger 教授と私



ラボの仲間 (Marc & Martina) と一緒に

ボンディング処理を一括で行う All-in-one adhesive system が多く見られるようになりました。これらは、接着操作が簡略化されるといふ長所を持つ一方で層分離やエアブロー後の水や溶媒の残留による接着強さの低下など、改善されるべき問題があります。そこで、私自身で新たな adhesive system を開発できないかと考えました。Finger 教授のラボでは化学工場と交流があり、新規 All-in-one adhesive system の開発にはうってつけの環境でありました。週の頭に思い描いた adhesive system がその週末には届くのです。この環境を生かして、adhesive system に含まれる有機溶媒の質や水の含有量を変化させる等、様々な角度から基礎的研究を行い、データを蓄積し、それなりの成果を上げることが出来ました。半年という期間はあまりに短く、開発という段階には遠く及びませんでした。しかし、Finger 教授にはこの半年という短い期間でも研究の楽しさ、厳しさを教えて頂きました。また、仕事と遊びのメリハリをつける大切さを教えて頂きました。

ドイツ滞在 1 ヶ月を過ぎると急に肩の力が抜け、ドイツでの生活を楽しむことが出来るようになりました。ラボの仲間 (Marc と Martina)

は色々な相談に載ってくれたり、悩みの種の契約問題を片付けてくれたりと本当に良い友人が出来たと感じております。大家さん夫婦は「クッキーを焼いたのでどうぞ。」等々優しく接して下さり、また、語学の先生である Chapman 夫妻にはドイツでの生活様式を教えて頂き、ドイツの両親であり兄妹であります。買い物に行くと、街の人は「どこから来たの?」とか「いつまでいるの?」とか皆声をかけてくれました。半年間でしたが、ドイツ人の優しさにふれ、本当に良かったと思います。

ドイツという異国の文化やさまざまなイベント (クリスマス、カーニバル)、ドイツ人の優しさ、研究の楽しさ、厳しさを知り、また日本を違う角度から見ることができ、大学入学以来ずっと新潟大学にいた私には色々な意味で本当に勉強になりました。

最後になりましたが、この留学を無事に終えることが出来たのも、当分野教授 興地隆史先生、留学の話を紹介して下さった前明倫短期大学学長 下河辺宏功先生など多くの先生方のご支援の賜物と感じております。本当にありがとうございました。



クリスマス市 (ケルン大聖堂前)



カーニバル (ケルン駅前広場)